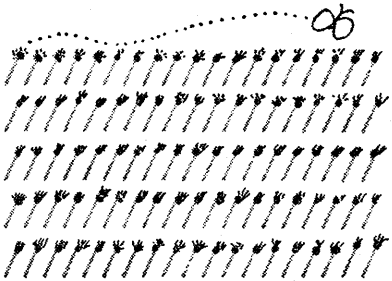

# 子供の頃のこと

中村為治

父はほんとうにいい父でした。

母はほんとうにいい母でした。

今もいつも父と母のことを思い出します。父と母のことを思い出すと、いつもうれしくなります。裕福な暮しでした。父母に可愛がられて育ちました。私の三、四歳の頃母は「為治生立日記」というのを書いて残してくれました。私はこれを宝物として大事に持っています。

幼稚園は芝公園の中にあった「芝麻布共立幼稚園」に通いました。田中先生という堂々とした女の先生が園長先生でした。姉もここに通っていましたが、後お茶の水の幼稚園に行くようになりました。幼稚園には大きな桜の木があって美しく花を咲かせ、花びらがひらひらと散りました。門の前の幅一間ほどの溝には、こうほねの黄色い花が咲きました。垣根はからたちの垣根でした。

遊戯室には大きなガラス戸のはまった戸棚があって、中にはいろいろな鳥や獣の剝製がはいっていました。白さぎや鷹や鷲がいました。リスやいたちもいました。大きな高脚蟹やたいまいも壁にかかっていました。私はこれを見るのが好きでした。

教室では腰かけのついた小さな机に腰かけて、折紙をしたり、細く切った折紙をもう一つの条を切った折紙に挿して模様を作ったり、絵をかいたり、粘土細工をしたりしました。その頃伊達さまのおひいさまというのが姉の組にいました。姉は「伊達さまはちりめんのお枕でーえおふとんも」という歌をつくり、自分で節をつけて歌っていました。私も今でもその歌を歌うことができます。

幼稚園からは大門まで歩き、大門からは鉄道馬車に乗って銀座まで来、銀座からは歩いて明石町の家に帰りました。馬がきれいな馬だとうれしく、きたない馬だといやでした。新橋の角には博品館という勧工場があって、そこではゼンマイ仕掛けの汽車がトンネルを出たりはいったりするおもちゃや、水鉄砲や紙風船や南京玉を買ってもらいました。コルクの栓をつめて引金を引くと、ポンと大きな音のする鉄砲も買ってもらいました。

明石町の家の庭には大きな石がいくつもあって、そこにはよくとかげが出て来て日向ぼっこをしていました。またさざんかの木があって、冬に美しい花を咲かせました。私はさざんかの花が好きでした。今も好きです。

長徳というまだ子供の書生がいて、二人でよく遊びました。長徳は絵が上手だったので、一緒に絵をかき、クリムソンレーキ、ガンボージー、サップグリーン、コバルト、プロシャンブルー、セピヤというような色の名前を憶えました。

ミセス　ハンブレンの日曜学校では O How do you do, and how do you do, and how do you do, to-day. Lips say good morning, eyes say good morning, ears say good morning, to you, and you. という歌を習い、それに節をつけて今も歌うことができます。ミセス　ハンブレンの家にはいると、いつも天火やバタのにおいの

ようなにおいがしていました。居間の大きな石油ランプにかかっていた薄紫のランプシェイドはほんとうにきれいでした。母はここで白ソースの作り方をおそわり、牛肉のシューシューに白ソースをかけて食べるのは私の大好物でした。

お正月の来るのは何よりもうれしいものでした。「もういくつねるとお正月、お正月にはたこ上げて、こまをまわして遊びましょ、はやくこいこいお正月」という歌の通りでした。鴨雑煮はおいしいものでした。二色玉子ときんとんはうれしいものでした。いろはがるたをしたり、すごろくをしたりしました。そして私はたこ上げに夢中になってしまいました。

三月三日は雛祭り、姉や妹のたくさんのお雛様が並べられ、ぼんぼりに灯が入れられ、桃の花が飾られ、白酒や菱もちや桜もちや飴細工のきれいな飴や雛あられが供えられました。

五月五日は男の節句、鎧かぶとや武者人形が並べられ、旗さしものが飾られ、糸を引くと上ったり下ったりする鯉に抱きついた金太郎もありました。そして庭には鯉のぼりが上げられました。始めは黒と赤の二匹でしたが、そのうちに小さな鯉もいくつかつけて、子供の鯉だと言ってよろこびました。

よく上野の動物園に行きました。せいやといういい女中に連れられて行きました。銀座の木村屋であんパンやじゃみパンを買い、それから電車で上野に行き、動物園に行きました。昔の動物園はいい動物園でした。土があって、木が繁っていて、ほんとうに静かないいところでした。今も昔と全く変らないのは、はいって直ぐの谷底にある丹頂鶴のいるところだけです。先日行きました時にも、やはり二羽の大きな丹頂鶴がここにいました。大きな丹頂鶴はほんとうに美しい立派な鳥だと思いました。象は昔後脚の一つを鎖でつながれて、大きな木造の小屋の中にいました。前にはお煎餅をやることができましたが、今ではもう何もやることができません。ライオンや虎や豹は木造の建物の檻の中にいました。虎が肉の

塊りを食べるのを見ました。北極熊は今も昔と変らず、狐や狸はひどく臭く、らくだは口からあぶくを出しているので、きたないと思いました。動物園の帰りには池の端のお汁粉屋でお汁粉をたべ、山下でゴム風船や、吹くとピーッといって長く伸び、またくるくると巻かれるおもちゃなどを買って帰りました。

浅草の花屋敷にも行きました。花屋敷では「鍋島の猫騒動」というあやつり人形を見ました。目が皿のようで口が耳まで裂けている大きな猫があんどんの油を舐めていました。あしかが水槽の中でばちゃんばちゃんと泳いでいるのも見ました。大きな鯛やすずきが泳いでいるのも見ました。また赤い卵をおなかにつけた可愛い鮭の子がいっぱい泳いでいるのも見ました。

明石町の家の前には両岸が石垣になっている川がありました。その石垣からは引き潮になると蟹がはい出して来ました。その蟹をしゅろの輪をつけた竹竿で釣り上げました。もくぞうやみずがには釣れましたが、べんけいは素早く隠れてしまうのでなかなか釣れませんでした。また上げ潮になると目高が目高の学校のように泳いで来ました。それをかやで作った網ですくい上げました。そのすくい上げた中には小さな透き通った小えびもまざっていました。また家の前の空地の草むらではとうすみとんぼやおうとを取りました。ばったはおなかがぐにゃぐにゃしていて、口から黒い汁を出すので取りませんでした。

春には月島に渡って、もち草を取ったり、しじみを取ったりしました。始めは佃島の渡しだけで、ろをこいで渡しましたが、後にはかちどきの渡しができ、蒸気に引かれて渡りました。向う岸に近づくと蒸気はチーンと鐘を鳴らして渡し舟をはなし、渡し舟はそのまま進んでドンと岸につきました。月島は広い野原でした。たんぽぽが咲いていて、蝶々が飛んでいて、空では雲雀が鳴いていました。もち草もたくさん取れました。しじみもたくさん取れました。私はしじみのみそ汁が大好きでした。そのしじみは夕方になると小さな男の子が「しじみ、し

じみ」といって売りに来ました。もっと大きな男の子は「いわしこ、いわしこ」といって鰯を売りに来ました。

夏には年寄りの朝顔屋さんが「朝顔や、朝顔」といって売りに来ました。「あっ朝顔屋さんだ」と言って、皆で飛び出して行って朝顔を買いました。紅いの、白いの、青いの、紫の、茶色のと、いろいろありました。この朝顔屋さんは年寄りで、しわだらけで、まっ黒に日焼けしていて、流れる汗を手拭いでふいていました。ほんとうにいい朝顔屋さんでした。

その頃私は三輪車に乗って明石町の居留地の中を走り廻りました。異人さんのお母さんが小さな子供を乳母車に乗せて散歩していました。私は妹や弟を三輪車の後ろに乗せて、橋のたもとの急な坂道を一気に走り下りました。妹や弟はこわがって、私にしがみついて、キャーキャーいいました。

七ツで高師の附属小学校にはいりました。学校は道路を隔てて高等商業の隣りにありました。明石町から日比谷まで歩き、電車に乗って錦町三丁目まで行き、そこから歩いて学校まで行きました。そのうちに外壕線ができたので、明石町から鍛冶橋まで歩き、外壕線に乗って錦町一丁目まで行き、そこから歩いて学校まで行きました。学校の運動場には大きな柳の木がありました。一、二年は赤房、三年から上は白房でした。帰りにはよく友達と一緒に歩いて、一ツ橋を渡り、お壕端を通り、三菱ケ原を抜け、鍛冶橋、京橋を渡って明石町の家に帰りました。お壕端の柳の新芽はきれいでした。ある日のこと学校からの帰りに錦町の手前の洋服屋の犬が寝ていたので、頭をさすってやったら、ワンといって左手の手のひらを咬まれました。ハンケチで押えて、家に帰って、ころんで釘をさしたと嘘を言いました。すぐに林病院に行って手当てをしてもらいました。

学校で好きだったのは手工の時間でした。一所懸命に鉋をといで板をけずりました。六年の終りには小形の茶だんすを上手に作りました。また乾電池と電磁石と三輪車のベルを使って呼び鈴を作ったり、太い竹の筒で吸上

げポンプを作ったり、試験管に石炭の粉を入れてアルコールランプで熱してガスを出させ、それを細くしたガラス管の先から吹き出さして火をつけたりしました。したいことは何でもすることができました。ほんとうに楽しい子供の時代でした。

夏休みには毎年越後の鯨波に行きました。楽しい楽しい夏休みでした。朝の散歩では、海岸の波打ちぎわを歩いて貝を拾ったり、山に行って山百合やおみなえしやなでしこを取ったりしました。八時から十時までは勉強の時間で、十時と三時に海にはいりました。昼には魚を取りに行ったり、投網を打ちに行ったりしました。また山の草原にきりぎりすや蝶を取りに行きました。夕食後には家のすぐ下の砂浜で、鬼ごっこをしたり、かけっこをしたり、後ろの正面だーれをしたりして遊びました。またよく絵をかきました。真正面の佐渡ヶ島をかいたり、鬼穴のある岬をかいたりしました。また母がお産やなどで来られない時には、よく母に手紙を書き、絵や習字を送りました。鯨波の朝日は山の後ろから出るのでよく分りませんが、夕日は日本海に沈むので、それはそれはきれいでした。

鯨波では朝漁師のおかみさんが取れたての小鯛を笊にのせて売りに来ました。大きなすずきが取れた時には漁師が自分で売りに来ました。小鯛の塩焼きや煮つけもおいしかったが、大きなすずきの刺身とあらの煮つけはとてもおいしいものでした。そのおいしさは今も忘れられません。

小学六年になった時、小学校は一ッ橋から大塚の高師の裏の崖下に移りました。築地一丁目から電車に乗り、日比谷で乗りかえ、春日町で乗りかえ、伝通院前で下りて、学校まで歩きました。新しい校舎では毎日雑巾がけをしました。そこには池があり、木が繁っていて、静かないい所でした。学校の帰りにはよく友達と一緒に小日向台町に出、久世山の険しい高い崖を一気に滑り下りて江戸川橋に出、そこから電車で伝通院を廻って家に帰りました。

その頃アメリカン・スクールは明石町の居留地にありました。小学五年の頃からそこのミス　タッカーに英語を教わりました。虹は「売れん棒」と憶えました。ある日ミス　タッカーは新調の美しい薄紫のワンピースを着ていました。Your dress is very beautiful と言ったら、ミス　タッカーは大そうよろこびました。またミス　タッカーは Fugetsudo's ice cream very nice と言っておいしそうに食べる真似をしました。また No thank you という言葉を習ったあとで紅茶を出されました。砂糖を入れますかと言われた時、姉は習いたての No thank you を言ってしまいました。ミス　タッカーは目を丸くしました。私は Thank you と言って砂糖を入れてもらいました。

そして附属小学を卒業して附属中学にはいりました。その時附属中学はお茶ノ水の煉瓦造りの立派な校舎でした。西隣りには女高師があり、東隣りには聖堂がありました。

「春湯陵の花のかげ、秋茗渓の月のもと、飛び交う胡蝶は風に舞い、下行く水は楽奏ず、慈愛平和にみち満てる、自然の寵児我なるぞ。」と校歌に歌われている我は私自身のことと思われました。

だが校舎はその年の秋にお茶の水から大塚の本校のわきに建てられた、明るい、薄緑色の新しい校舎に移りました。そして私も子供の時代から中学生の時代に移りました。けれどもいつも

父はほんとうにいい父でした。

母はほんとうにいい母でした。

〔著者紹介〕　明治三十一年一月十七日生れ。昭和十六年まで東京高等商業学校(現一ッ橋大学)の英文学の教授。その後、長野県安曇村で農夫として生活。著書に、ロバート・バーンズの研究、『エチカ』の翻訳（山本書店刊）等があります。お母さまは、女子師範の附属幼稚園を卒園されたとのことです。